

聖書:第一列王記20章22～43節

説教:いのちの代わりとなる

はじめに

最近、私たちの近くでも子どもが虐待されるという悲しいニュースがありました。そんな話を聞くたびにいったいどこに神はおられるのか。この世に真理というものがあるのか。そのような疑問を持つ方もおられるのではないかと思います。

これまでのあらすじですが、北イスラエルの七代目の王となったアハブが、北隣のアラムの王であったベン・ハダドが武器を持って攻めてきたとき、一人の預言者のアドバイスのおかげで、ベン・ハダドを追い返すことができました。それで今日の箇所が続きます。

でもここには、私たちの常識に反する理解に苦しむようなことが書かれているように感じます。子どもが悲しい思いをして死ななければならないようなこの時代に聖書が何かの役に立つのか。そんな反発さえするかもしれない。しかしここにはまさに今の私たちに必要な希望が記されています。そのことを見てまいります。

1 アハブ王(北イスラエル)

1) ベン・ハダド(アラム) との戦い

アラムの王であるベン・ハダドは、年が改まると再び北イスラエル攻略に向けて出陣します。その際、作戦を変えて、今回は平地の戦いに持ち込むことにする。対するアハブ王はどうしたか。前回も登場した「あの預言者」が現れ、来年の今頃再び戦争になるから、いまから備えておくようにとアドバイスします。そして実際に戦争が始まると、今度は「一人の神の人」が近づいて来て、28節後半でこう語ります。「主はこう言われる。『アラム人が、主は山の神であって低地の神ではない、と言っているのだから、わたしはこの大いなる軍勢をすべてあなたの手に渡す。そうしてあなたがたは、わたしこそ主であることを知る。』」その結果、ベン・ハダドと彼の家来たちは袋小路に追い込まれ逃げ場を失ってしまいます。

2) 逃がした

そこでベン・ハダドの家来たちは考えます。このままでは殺されるだけ。ならば、ここは一か八かの勝負に出よう。腰に荒布をまとい、首に縄をかけて命乞いをしたらもしかして助けてくれるかも知れない。それで腰に荒布をまとい、首に縄をかけ

てアハブ王の前に出て行った。そうしたらアハブは、「彼はまだ生きているのか。彼は私の兄弟だ」と言って、敵を逃がしてやった。以上が34節まで書かれている内容です。みなさんどう思いますか。敵が命乞いをして出て来たとき、アハブは彼らを赦した。アハブは心の優しい王様だったのかなと心が和むかもしれない。ところがどうもそんな単純な話ではない。35節以降で意外な方向に話が展開していきます。

2 預言者

1) 「私を打ってくれ」(7回繰り返される)

35節。「預言者の仲間の一人が、主のことばにしたがって、自分の仲間に「私を打ってくれ」と言った。しかし、その人は彼を打つことを拒んだ。」いきなり「私を打ってくれ」と言われたら誰だつて断るはずです。ところがその断った人は、ライオンに襲われて殺されてしまう。預言者はまた別の人に「私を打ってくれ」と頼み、今度その人は預言者を打って傷を負わせる。いったいどうしてこんなことをするのか。その理由を理解するためにはもう少し話を先に進める必要があります。

2) 「聖絶しようとした者をあなたが逃がしたので」

次にこの預言者は、目の上に包帯を巻きながらアハブ王が通りかかるのを待つことにする。その姿は、誰の目にも戦いで傷ついた兵士の一人にしか見えなかったでしょう。そこへアハブがやって来たのでこう問いかけます。39節から40節の前半。

「しもべが戦場に出て行くと、ちょうどそこに、ある人が一人の者を連れてやって来て、こう言いました。『この者を見張れ。もし、この者を逃がしでもしたら、この者のいのちの代わりにおまえのいのちを取るか、または、銀一タラントを払わせるぞ。』ところが、しもべがあれやこれやしているうちに、その人はいなくなっていました。」それでアハブは即座に答える。「おまえは、そのとおりにさばかれる。おまえ自身が決めたとおりに。」

それを聞いた預言者はいきなり巻いていた包帯を取って42節でこう言う。「主はこう言われる。『わたしが聖絶しようとした者をあなたが逃がし

たので、あなたのいのちは彼のいのちの代わりとなり、あなたの民は彼の民の代わりとなる。』」

何を言いたいのか。「私が聖絶しようとした者」とは明らかにベン・ハダドを指している。アハブがベン・ハダドと簡単に和解し、逃がした責任をアハブが負わなければならない。それでアハブのいのちを代わりに取り上げ、アハブに属する民たちのいのちを代わりに取り上げる。そう言っています。どうしてこんな厳しいことを言われるのか。確かに理由はあったのです。

3) 「すべてをあなたの手に渡す」(28節)

そもそもアハブ王は神からこう言われていました。28節。「わたしはこの大なる軍勢をすべてあなたの手に渡す。そうしてあはたがたは、わたしこそ主であることを知る。」「あなたの手に渡す」とは、「あなたの好き勝手にしてよい」と言う意味ではありません。イスラエルの神を侮り、神に刃向かってきたベン・ハダドを、あなたは神に代わってさばかれなければならない。そうすることであなたは、イスラエルの神こそまことの神、主であることを知ることになる。そのような内容でした。もし主の命令に従わなかったならば、たとえ預言者であろうとも獅子に襲われて死ななければならない、それほど絶対的な命令でした。

ところがアハブは神の助けがあつてこそ戦いに勝てたはずなのに、そのような恵みを忘れ、主の命令も忘れてベン・ハダドを逃がしてしまいます。なぜ逃がしたのか。敵の兵士たちが、荒布をまとい首に縄をかけて、「イスラエルの王は恵み深い王である」と言つて出て来ました。それを聞いてアハブの心は揺れます。自分は恵み深い王であると誇りたかつたのかもしれませんが。それでベン・ハダドをさばかず、逃がした。そんなアハブの態度を見ても私たちは違和感をほとんど感じない。動機は何であれ、アハブは白旗を掲げてきた兵士を赦し、和解したのだからすばらしいことをしたのではないか。それなのになぜ神はアハブを責めるのか。そう思いたくなる。

3 神

1) 神のさばき：代わりのいのちを要求する

このことはよく考えなければなりません。二つのポイントを挙げながら整理していきます。

一つ目。アハブに対してベン・ハダドをさばくように命令したのに、それに従わなかったとき、アハブのいのちを彼の代わりとすると言われました。

言い換えれば、代わりのいのちを要求するほど、神のさばきは絶対であつて、決してあいまいにされるものではない。こう言う。「聖書の神は厳し過ぎる」という声が必ず上がります。

でももし神が罪をさばかないということになれば、どうなるのか想像してみてください。平和な世界になると思いますか。仮に自分がある人からひどいことをされ、それで人生がめちゃくちゃにされ、それなのに相手はさばきを受けないのうのと暮らしていたとしましょう。そんな世界は楽しいですか。むしろ苦しみではないですか。正直に生きようとするほうが馬鹿馬鹿しい。好き勝手に生きればいいのですから、モラルも何もないめちゃくちゃな世界になってしまいます。そうしますと、神は必ず罪をさばく方である言われることが、実は私たちにとって大きな希望であつたことが理解できます。

しかしすぐにわかるように、これは同時に私たちにとって恐ろしいことにもなってしまいます。今度は仮に、自分がほかの人に対して取り返しのつかない悪いことをしてしまったとします。神は必ず罪をさばく方ですから、この私がさばかれることになる。全員が生まれながらの罪人だとも言われるのですから、全員が神にさばかれなければならないことになる。これは絶望です。

2) 神の赦し：神ご自身が代わりのいのちとなれる

もちろん神は私たちを絶望させる方ではない。そこで二つ目のポイントになります。42節。「私が聖絶しようとした者をあなたが逃がしたので、あなたの命は彼の命の代わりとなる。」

もしさばきを逃れる者があるなら、神は逃れた者に代わって別の命を要求する。アハブが失敗したことで言われた厳しいことばに聞こえました。でもここでイエス・キリストを思い出していただきたい。この方は何をしてくださつたのか。私たちは神の前に罪人であつて、さばかれて滅ぼされるべき運命にあつた。ところが神は、もし罪を悔い改めるなら、その罪を赦し、さばきから逃れる道を備えてくださった。それが十字架です。赦しをいただいた私たちは、今日も安心して神の前に出ることができる。よかつたよかつた。

しかしそれで話が終つたのではない。アハブがベン・ハダドを逃がしたとき神はなんとされたか。逃したベン・ハダドの代わりに、アハブのいのちを要求すると言われた。この原則は聖書全体を貫き通します。十字架も例外ではない。十字架に

よって私たちがさばきから逃れることができたというのなら、誰かが私たちのいのちの代わりにならなければならない。いったい誰ですか。イエス・キリストにいのちです。だから主が十字架で死んでくださった。そのような真理がここに記されています。

3) 傷を負った預言者

そのような真理を神はどのようにして示しましたか。預言者はアハブに会う前に、手の込んだ複雑な準備をしていきました。主のことばに従って「私を打て」と言い、自分の体を打たせる。そのようにして顔に包帯を巻くほどの大きな傷を負ってアハブ王の前に出ていく。ただアハブを責めるだけならこんなことをする必要はありません。

この時代、悲しい事件が起こるたび、いったいどこに神はおられるのか。どこに真理があるのかと疑いたくなります。

でも、神はどこか遠くにおられるのではないのです。高いところにおられて真理はここにあるから取りに来いというのでもない。神は私たちのところに降りてこられました。それだけではない。あの預言者がしたように、主は身体に傷を負い、十字架というこの世で最も愚かなところにつるされます。そこに神がおられる。そのようにして、この希望が見えない罪の世に真理を示してくださいました。そのようにしてくださった主の御名をあがめたいと思います。。